

# 一般意味論

足立正治

## 目次

一般意味論との出会い	1
一般意味論のアウトライン	2
私たちは世界をどのように認識しているか	7
禅と一般意味論	9
「概念」と「感覚」をつなぐ「ことば」のはたらき	10

## 「一般意味論」との出会い

高校3年生だったか大学に入ってからだったのか、記憶はあいまいだが、たまたま手にした『**言葉の魔術**』\*（日本放送協会編、大日本雄弁会講談社ミリオン・ブックス、1957）を読んでみたら、すごく面白かった。それは、一般意味論を実際、具体的に紹介するために、NHKのラジオ番組「言葉の研究室」で1956年11月から1957年3月まで5ヶ月間にわたって放送された内容をまとめたもので、言葉の使われ方によって現実の社会が歪んで見えたり、視点がずらされたりすることに気づき、自分を取り巻く世界を見なおしてみる、批判的な視点が痛快だった。その後、数年を経て『**思考と行動における言語**』（S.I.ハヤカワ著、大久保忠利訳、岩波書店、1965）が翻訳出版され、同じころに読んだ『**話しことばの科学**』（斎藤美津子著、サイマル出版会、1968）や『**意味論入門**』（片桐ユズル著、思潮社、1965）などと合わせて一般意味論の体系を知る。学校教育では、東京学芸大学の井上尚美氏らが国語教育に取り入れようとしていたが、その経緯や指導内容については『**国語教育・カウンセリングと一般意味論**』（井上尚美・福沢周亮著、明治図書、1996）に詳しい。だが、いま振り返ってみると、当時の一般意味論のとらえ方は、「ことば」の問題に偏っていて、言葉以外の記号作用や、言語化以前の神経組織の働きにたいする配慮が必ずしも十分ではなかった。わたしがそのことに気づいたのは、1980年にカナダで開かれた一般意味論のセミナーと国際会議に参加してからのことだ。トロントから列車で2時間ほどのところにあるオンタリオ州ロンドンの、まるで森の中に大学があるようなウェスタン・オンタリオ大学で2週かにわたって開かれたセミナーでは、記号行動を批判的にみなおす一般意味論の基本概念ばかりでなく、認識の原点である身体感覚に焦点を合わせたリスニングやセンサリー・アウェアネス、アリストテレスからアインシュタインにいたる科学的認識の歴史、画家や詩人や言語学者を招いてのセッション、いま、ここでの人々との交流に焦点をあてて語り、歌い、踊り、他者と純粹無垢な関係を築いてゆくグループワークなど、さまざまな次元の人間活動を対象としたセッションが用意されていた。そんな環境のなかでわたしはアタマ・ココロ・カラダを十全に機能させることで、自己の統一感を得ることができた。

やがて、わたしはクリティカル・シンキングやメディア・リテラシーの教育に関心をもつようにな

るが、一般意味論の統合的でホリスティックなパラダイム\*\*は、いまも、自らの思考と行動の評価体系として大いに役立っている。

## \*『言葉の魔術』の目次

言葉の魔術とは	大久保忠利	社交と言葉の魔術	中村通夫
言葉と事実	平井昌夫	新聞と言葉の魔術	堀川直義
文脈と単語	水野賢	選挙と言葉の魔術	平井昌夫
漢字と漢語	倉石武四郎	広告と言葉の魔術	森岡健二
比喩と真実	上甲幹一	恋愛と言葉の魔術	望月衛
文学と言葉の魔術	多田道太郎	呪いの言葉	鶴見俊輔
科学と言葉の魔術	乾孝	嘘のいろいろ	金田一春彦
論争と言葉の魔術	原佑	言葉の正確不正確	熊沢龍
裁判と言葉の魔術	正木ひろし	言葉の魔術からの開放	大久保忠利

## \*\*片桐ユズル『一般意味論セミナー——1日おきのジャムをたべるには——』（くろしお出版、1983）

一般意味論は、ことばはもちろんのこと、そのほか記号一般←と→行動、の相互関係をしらべます。異文化が入りみだれ、新旧の感じ方がはげしく変わりつつある現代において特に、一般意味論は必要である、とわたしたちはおもいます。

なぜなら一般意味論では、もろもろの行動を意味的反応の側面においてとらえ、どのような記号行動がわたしたちを生きのこる方向へみちびくかを基準に、批判と修正をくわえ、進化の袋小路におちいらぬような意味的反応が体得できるように努めています。

いいかえれば一般意味論は、記号作用に対する自覚を全般的に高めることで、自己実現をめざす、ともいえます。

一般意味論の中心のかがえ方は、記号作用を抽象の過程として見ます。この立場は、もろもろの異なった分野や方法を整理統合するわくぐみになるばかりでなく、この混乱の時代において分裂しながらわたしたち個人の統合にも役立っています。

たとえば一般意味論の守備範囲を抽象のレベルの高低にしたがって次のように分けてみることができます。1.「できごと」が神経末端をシグキするところからはじまって→言語に発せられるまでの、主として「言語以前のプロセス」。2.は1をふくみながら、言語化のいろいろなレベルにおける反省と工夫。3.は1と2をふくみながら、文化的社会的なひろがりにおける記号状況全体についての理解とクリティーク、すなわちメディア・エコロジー。

「記号」と、それが指し示す「現実」との関係についての自覚をたすけるために、それをコージブスキーは「地図」と「現地」の関係にたとえ、次の3つの格言にまとめた。

1. 地図は現地ではない。
2. 地図は現地のすべてをあらわすわけではない。
3. 地図についての地図をつくることできる。

## 非アリストテレス的思考法

アリストテレスの論理学における「思考の法則」

「AはAである」（同一律）

「AはBでかつ非Bではありえない」（矛盾律）

「AはBかまたは非Bでなければならない」（排中律）

私たちは日常的な言語使用のなかで、反射的、無意識的にこのアリストテレス的な二値的体系を受け入れ、とらわれていることがある。しかし、これらの法則は必ずしもプロセスとしての現実を反映しているとはいえない。飛んでいる矢の運動を説明したり、電子は粒子でありかつ波動である、という科学的認識を得るには不十分である。日常的な意見や信念の基盤を、この通俗的で二値的な論理から近代科学が提起する多值的（＝非アリストテレス的）論理に転換するにはどうすればいいか。

プロセス

「われわれは同じ河の中に二度と足を踏み入れることはできない」（ヘラクレイトス）

水の流れはたえず変わるし、その水の流れに足を踏み入れる人間の方もたえず変わる。その意味で「河に足を踏み入れる」という行為は、その度に異なる新しい経験であるといえる。すべては変化し、実在はプロセスである、ということ考を考慮に入れることによって、わたしたちは環境の変化に適応して、問題を解決し、創造的に生きることができるようである。

「地図」と「現地」

わたしたちは現実を記号化し、その記号を使って環境（状況）に働きかけ、問題を解決し、創造的な活動を行なっている。言語などの記号と現実との関係を地図と現地の関係にたとえるなら・・・

「地図は現地ではない」（非同一性）

「地図は現地のすべてをあらわさない」（非全体性）

「地図についての地図を作ることができる」（再帰性、自己反映性）

非ユークリッド幾何学がユークリッド幾何学に対して、相対性理論や量子力学がニュートン物理学に対してそうであったように、非アリストテレス的体系はアリストテレス的体系を否定するものではなく、前者は後者を特殊のケースとして包含する、より一般的な体系である。

## 一般意味論のアウトライン

タイム・バインディング（時間を結ぶ）の機能をじゅうぶんに発揮して、何マイルも何世紀も離れた

人々の神経システムを利用して人類の生き残りや進化をめざす。

私たちは自分の経験を「ことば」などの記号に変えることで、その経験を振り返ったり、時間と空間を超えて他者に伝達したり、さらに、その経験を再構成して新たな現実を創造することができる。この能力によって、人はすべてを一から始める必要なく、他者の経験や思考を受け継いで前進することができるのである。しかし、歴史が示すように、ことばは時空を超えた協力の道具として役立つばかりでなく、闘争や紛争、狂気や社会的混乱の原因ともなってきた。そのことを憂慮したポーランド生まれのアルフレッド・コージブスキー(1879-1950)は、人間に特有の能力である、記号を使うことで

時間を結ぶ能力（タイム・バインディング）と、記号を使いながら記号について意識できる能力（self-reflexiveness）を活かすことで、人はヒ生存的な記号行動に陥らずに進化できるはずだと考えた。彼は、1933年にアメリカで『科学と正気』を出版、自ら開発した体系を「一般意味論」と名づけた。それは、言語学における意味論とは異なり、私たちが生きる営み一般に適用して正気に生きるための思考の枠組みやツールなどを提供してくれる。

ことばが思考とコミュニケーションの道具として用いられる、その最前線にあって結果の成否の鍵を握るのが「意味」である。この場合、「意味」はコミュニケーションにかかわる当事者どうしが主体的に関わる「相互作用」としてとらえられる。それは言語学における意味論が、意味を抽象的で普遍性をもった一般的現象として記述しようとするのとは異なるタイプの意味論を必要とする。ここでは、言語行動の評価を目的としてコージブスキーによって提案された一般意味論の概要を Kenneth Johnson の Outline Survey of General Semantics（Institute of General Semantics）をもとにして紹介する。

### 1. 一般意味論とは？

Ch. W. モリス（『記号理論の基礎』1938）の分類によれば、一般的に言語研究の領域は次の3つに分類できる。

言語構造の記述 辞書の定義、文法や統語論、音韻論など（言語の枠内で言語記号相互の関係を記述するのはこの領域の仕事である）

意味論 意味論は言語の外にも目を向けて、ことばとその指示対象との関係を記述する。

語用論 解釈者の立場から、ことばとそれをを用いる人間の意図との関係を記述する。

一般意味論はこれら3つの領域と重なり合う部分があり、その成果を利用するが、その中心課題は何よりも、ことばと行動との関係を評価し、それを人間の生存にとってプラスになるように役立てることにある。すなわち、一般意味論は単なる意味現象の記述にとどまらず、よりよいコミュニケーションのために私たちがそれをいかに利用するかという領域までを含むものである。

#### (1) 一般意味論は言語が思考に及ぼす影響を意識化する

一般意味論は言語体系に内在する前提と、その言語を使用することによって受ける個人的、文化的な影響を問題にする。私たちは成長過程において、言語にたいする反応の仕方を学習し、言語による世界の見方、経験のとらえかた、考え方などを身につけている。しかし、私たちは習慣的に使っていることばの構造が自分にどのような影響を与えているかということに気づかないでいることが多い。ことばが無意識のうちに私たちに「押しつけている」構造上の前提や含意を解き明かし、意識化することが一般意味論の仕事である。

#### (2) 一般意味論は円滑なコミュニケーションのために利用できる

このことは対人関係という視点から見れば、より現実的な問題としてとらえることができる。私たちは生まれつき、言語獲得能力、あるいは人間という種にとって普遍的な世界のとらえ方、つまり「普遍文法」とでもいべきものを持っていると仮定することができるが、決して特定の言語を身につけ

て生まれてくるわけではない。したがって、たとえ同じ言語社会に生まれ育っても、言語を身につける環境は人それぞれに異なっているし、同じ言葉でもその受けとめ方や反応の仕方には個人差がある。また、コンテキストのとらえ方や、含意の含め方、その解釈の仕方も完全には一致しないのが普通である。そのような個人が互いに話し合うとき、誤解が生じることは避けられない。私たちは、常に誤解したり誤解されたりする状況にある。その誤解に私たちが気づくのは、自分が相手の予想や前提を裏切ったり、自分の予想や前提が相手に裏切られたときである。誤解によって起こる混乱を回避するには、次のことを前提にしてコミュニケーションをする必要がある。

- ・ことばの意味の受け取り方は人によって異なるので誤解は必然的に生じるものである。
- ・誤解を無くすことはできないが、誤解をできるだけ少なくする努力は可能である。
- ・そのための方法論として一般意味論を役立てることができる。

## 2. 直接経験とことば

### (1) 感覚器官の働き

私たちが自らの感覚器官を通して直接的に知覚し、秩序あるものとして構成する世界を「直接経験の世界」または「外在的世界」と呼ぶ。それは時間的、空間的に切れ目のない連続性をもった世界である。直接経験によって、私たちは対象の微妙な差異や変化を敏感に感じることができる。

しかし、直接経験によってとらえられる世界は、五感でとらえられる限られた世界であるともいえる。私たちの身体は環境から常に何らかの刺激を受けて反応しているが、感覚器官を通して知覚できる刺激と知覚できない刺激がある。例えば、紫外線や放射線は感覚器官を通して知覚することはできないが、私たちの身体にたいして確実に何らかの影響を及ぼしている。また、身体にたいして何ら刺激として作用しない物理的存在もある。たとえば、テレビやラジオの電波は受信機を通さないかぎり、身体は何の影響も受けない。このように、感覚器官がとらえる環境データはきわめて限られたものであり、私たちの周囲で起こっている多くのことは、まったく感じ取ることさえできないのである。さらに、感覚器官の機能にも個人差があり、疲労や空腹など身体的状態や環境への適応の程度など、その時、その場の状況によっても感覚器官の機能の仕方は変化する。何らかの原因で自分の知覚から漏れている情報があること、自分とは違った知覚の仕方もあることを自覚すること、これがコミュニケーションにあたって心得ておかなければならない第1の基本的前提である。

また、私たちは環境からの刺激をそのままの形で知覚しているのではない。放送の電波が受信機によって音や映像に変換されるように、私たちが知覚しているものは、なまの刺激に対する神経反応である。つまり、私たちは自分の神経組織が解釈したようにしか外界をとらえることができないのである。これがコミュニケーションに際して心得ておくべき第2の基本的前提である。

### (2) 直接経験からことばへ

直接経験をそのままの形で伝達することはできない。経験はまず別の記号で表し、その記号を情報として伝達するのである。それには、情報の送り手と受け手は経験を記号化する際の一定のルールを共有している必要がある。そのひとつが、例えば言語体系である。私たちが自らの感覚器官を通して

空間的な広がりを持つものとしてとらえた世界は、送り手と受け手が共有している言語に特有のルールにしたがって分割され、時系列に並べられる。このとき、微妙な差異をもった連続体は、いくつかのかたまりとして切り取られ、空間的な知覚の広がりには線状に並べられる。例えば、「赤い花」という場合、不可分のものとして知覚した眼前の現象を「赤」と「花」というまとまりに分割し、それを一定の語順に並べている。具体的な花から色や形や大きさを切り離して、一般的な「花」という概念を構成し、一定の範囲の色の連続をまとめて、その範囲外の色と区別して「赤」としている。このように、言語の構造は直接経験の構造とは異なっている。そのために、直接経験をことばで伝達する際に、何らかの歪みが生じることは避けられない。このことを認識しておくことがコミュニケーションにおける第3の基本的前提である。コミュニケーションにおける混乱の原因は、ことばが事実を歪めていることではなくて、その歪みに気づかないことである場合が多い。

### (3) 一般意味論における意味の概念

これまで見てきたことから明らかなように、一般意味論では特定の言語表現と結びついた普遍性のある意味の記述を目的とするものではない。日常の言語生活において、その言語の使用者がかかわって生じる諸問題にいかに対処するかが関心の中心である。ことばと行動との関係を考察する一般意味論においては、意味は言語の使用者の反応としてとらえられる。

- ・私たちは「身体（神経組織）」が解釈したようにしか知覚できない。
- ・私たちが知覚しているものは、私たちが目を向けているものにたいする神経反応（＝知覚像）である。
- ・私たちが語るとき、外の世界について語っているのではなくて、自分の知覚像について語っている。
- ・出来事やことばにたいして、私たちは知的に反応するだけでなく、感情や運動をとまなう生理的な反応もしている。例えば、「梅干」や「レモン」ということばにたいする自分の反応を思い浮かべてみるとよい。この有機体としての全体的な反応を「意味反応」という。

## 3. ことばと思考

ことばの構造は他者とのコミュニケーションだけでなく、自分自身の思考や認識のありかたに次のような影響をあたえる。

(1) 私たちは、ことばで表された性質があたかも対象そのもののなかに存在するかのように語り、そう思い込んでしまうことがある。たとえば、「このバラは赤い」と語ることによって、無意識のうちにバラそのもののなかに「赤」という実体が存在するかのように思ってしまうことがある。しかし、よく考えてみると、光の反射を網膜で受けとめることによって自分が感じたことを、ことばによる分類にあてはめて述べたにすぎない。光の加減で色が違って見えることは日常的に経験することである。「このリンゴは甘い」とか、「あいつは怠けものだ」といった表現になると、個人の主観が介在する可能性はいつそう大きくなる。こうした表現は常に自分の「評価」を述べているのだということを意識しておかないと、うっかり「事実」を述べたことばだと錯覚することがある。そればかりか、それを一般化して、さほど甘くないリンゴでも甘いと感じたり、その人がいつも怠けてばかりいるように見

えてしまうこともおこりうる。

(2) 私たちは、ことばに依存して生活することに慣れてしまっているために、ついうっかりと、ことばとそれが表すものが同じだと錯覚することがある。外科手術の様子を詳しく聞いたり、蛇や蜘蛛の話の聞いただけで、過剰な反応をする人がいるし、梅干やレモンの話を聞いただけで唾液が分泌されることもある。ことばは何かを指し示す指のような役割をするものだというを自覚していれば、あたかも「月を示すために用いた指を月だと錯覚する」といった愚かな行為を避けることができる。

(3) ことばは類似性を強調するのに便利な道具なので、実際の細かい差異を見過ごしてしまうことがある。私たちは、一回限りの個別の事象を表すために、一つ一つ新たなことばを用いることはしない。いくつかの事象や関係を一つの範疇にまとめたことばを使って話すのだが、その範疇はあくまでも頭のなかにあるもので、外在的な事象そのものには存在しない。「赤」ということばで表される色にも、よく見ると彩度や明度によって無数の微妙な差異を感じるができるし、ヒットラーもバッハも同じように「ドイツ人」と呼ばれるが、まったく異なる人間である。「マスコミは信じられない」とか「女や子供というものは・・・」といった、ことばの使い方に見られるように、「同一視」の険はいたるところにある。

(4) ことばは話題となっている事柄について、すべてを述べているように使われることがあるが、実際には一部分について述べているにすぎないことが多い。上にあげた例でいえば、あたかも「すべての」マスコミを知っていたり、「すべての」女性や子供にあてはまる事実を述べようとしているような印象を受ける。宗教、社会運動、政治などの団体のなかには、私たちの抱えている問題が「すべて」解決されるようなスローガンを掲げるところがある。

(5) ことばは変化しないが、ことばが表している外在的な事象はたえず変化しつづけている。ことばだけにとらわれていると、たえず変化するダイナミックな現実を見落としてしまう。過去の事実を述べたことばを、うっかり現在の状態にあてはめたために時代の変化に適応できなくなった例もある。「あいつの言うことは嘘だ」「おれは敗北者だ」といった表現も、過去の事実を現在に適用しようとしていると考えられる。

(6) ことばで事実と推論を区別しないために、両者を混同することがある。自らの観察にもとづいて記述、報告したものが事実について述べたことばであり、それ以外のことばは推論である。

(7) 私たちはことばによって、二値的な評価をしてしまうことがある。言語には、善－悪、正－誤、老－若、強－弱、大－小といったように、対立関係によって互いの意味を規定する語の組み合わせが数多く用意されている。そのために、その中間にある微妙な程度の差を表すことはかならずしも容易ではない。その結果、「良く」なければ「悪い」にちがいないとか、「好き」でなければ「嫌い」だとか、「美味しく」なければ「まずい」といったような安易な価値判断をしてしまうことがある。そして、場合によっては、絶対的で完璧な「善」「正しさ」「成功」「幸福」などを求めて苦しみ、それが達せられなかったからといって自己嫌悪に陥ってしまう人もいる。

(8) ことばは世界を分割して示すので、分割された部分の集合が全体を表すと錯覚することもある。私たちはことばによって、本来は一体として働いているはずのものを「心」と「身体」、「形式」と「内容」、「時間」と「空間」といったように分離して考える習慣を身につけている。また、因果関係を考

える際にも、ひとつの原因がひとつの結果につながるという線状的で一方向的な図式を想定し、複数の要因が複雑に絡み合った相互関係には目を向けようとしないことがある。全体は単なる部分の集合とは違ったものである。化学変化に見られるように、部分の組み合わせは全体として質的な変化をもたらすことがある。

(9) ことばは相互作用を表すにはあまり適していない。因果関係を例にとれば、私たちは、普通、結果が原因に何らかの影響を及ぼすとは考えにくい。「先生は生徒を教える」ことによって、先生の方も生徒から何かを学んでいることは表現されていないし、「あいつをやっつける」ことによって、自分自身がどういう影響を受けるかは表現されていない。そのために、私たちは自分の行為が全体に及ぼす影響を考えないで行動することがある。常にフィードバックを考慮に入れて行動する習慣をつけておくとよい。

(10) 私たちは、ことばを使って事象を名付け、分類し、関係を記述し、評価する。つまり、ことばを使ってさまざまな事象をさまざまなレベルで抽象している。その際、細部が省かれ、無視される。常に言い残した部分があることを忘れないことで過度な一般化を避けることができる。

#### 4. 一般意味論のキーワード

##### (1) 投射

環境からの刺激が受容器官に達すると、複雑な処理を経て知覚像が形成される。知覚像は意識のなかに現われるものだが、私たちはそれを自分の内部で起っていることだとは思わず、身体の外にあるものだと思い込んでいる。つまり、自分の知覚像を対象に投射して、自分の外にある知覚対象として受けとめるのである。ことばも同じ働きをする。「蛇だ!」と思えば、道端に落ちている縄も蛇に見えることがある。

##### (2) 同一視

ことばにたいして、あたかもそれが事象そのものであるかのような反応をすることを同一視という。ことばは固有の実体を持っておらず、その都度、誰かが、何かを指し示すために用いるものである。「事実を述べた」ことばであっても、それは「事実そのもの」ではないことを心得ておくことが必要である。

##### (3) シグナルとシンボル

刺激に代わって、その刺激と同様の反応を自動的、反射的に引き起こすものをシグナルという。ベルの音に条件づけられた犬が、餌が与えられるか否かにかかわらず唾液を分泌するとき、犬にとってベルの音はシグナルとして作用している。このとき、反応する主体である犬は直接的な刺激とシグナルとを区別していない。これにたいして、シンボルとして作用している場合、反応する主体はそれが何を指し示しているかを理解して反応する。つまり、シンボルは知るという働きを媒介としている。ある刺激にたいしてシグナルとして反応するか、シンボルとして反応するかは、それを受けとめる主体の問題である。たとえば、私たちは赤信号をみとめると、自動的（反射的、習慣的）に立ち止る。このかぎりにおいて、赤信号はシグナルとして作用している。だが、左右を確認して車が通っていない

いことを確認してから道路を横断したとすれば、その人は赤信号をシンボルとして受けとめたといえる。シグナルとして受けとめた場合は、いついかなる場合にも習慣的に決った一定の反応しかできないが、シンボルとして受けとめた場合、それが指示する状況を把握したのちに、それにたいする反応を自由に選択できる。本来、ことばはシンボルとして機能するものであるが、日常生活においてはことばに条件付けられたシグナル的な反応をしている場合も少なくない。

#### (4) 遅延反応

ことばにたいする習慣的、反射的な反応を避けて、ことばをシンボルとしてとらえ、状況に応じた適切な反応をするには、ことばを聞いたあと、しばらく間をおいてから反応する習慣をつけておくといい。そのあいだに、状況を把握し、より適切な評価や対応を考えることができるからである。このように、ことばにたいして余裕をもって対応するには、日頃から緊張や焦り、不安やいら立ちといった状態から開放されて、寛容や忍耐や心の平衡を身につけておく必要がある。心や身体が過度に緊張していると、反射的な反応を抑えて状況を観察し、柔軟な対応を選択することが難しくなる。

#### (5) フィードバック

フィードバックということばは、エレクトロニクスやコンピュータの分野で用いられる用語であるが、ことばと人間の行動との相互作用について語るときに用いると便利である。ウィーナーの定義によれば、フィードバックとは「過去の行為の結果をシステムに再入力することによって、そのシステムを制御する方法である。」

フィードバックの説明には自動温度調節器の例がよく引き合いに出されるが、これは正確に言えば「負のフィードバック」の例である。これを人間の行動にあてはめていけば、たとえば、私たちは人前で話すとき、聴衆の態度や表情、あるいは質問といったさまざまな反応をフィードバックとして受けとめながら、聴衆にアピールするように話し方を調整する。このように、自分の行った行為の結果を参照しながら、自分の行為を修正したり、自分が考えたり話したりしたことがらを振り返って評価し、修正を加えるとき、「負のフィードバック」を利用しているといえる。

「負のフィードバック」にたいして「正のフィードバック」もあるわけだが、これは化学反応に見られるように、行為の結果がシステムの修正をしないで、連鎖反应的に拡大していく場合をいう。これを人間の行動にあてはめれば、例えば、妻が夫にがみがみ言うので、夫は酒を飲む、夫が酒を飲むので妻はいっそう夫にがみがみ言う、といったいわゆる「悪循環」のケースがこれにあたる。私たちは自分の悩みについて悩んだり、恐れを抱くことを恐れて、どうにも始末におえない状態にのめりこんでいくことがある。

#### (6) ことばによる暗示

自己暗示とは、自分があらかじめ結果を言語化したおいたことが、現実にもその結果を引き起こす原因の一つとして働くことをいう。例えば、「自分は算数ができない」と思い込んでいる子供は、それを未来を予言することばとして自分自身に言い聞かせているのである。その結果、やる気をなくし、本当に算数ができなくなることがある。「お前は頑固（神経質、音痴）だ」など、他人から何気なく言われたことばが、同様の結果を引き起こす場合もある。

#### (7) 抽象作用

私たちは環境から受けるさまざまな刺激を取捨選択して受けとめている。これを抽象作用といい、非言語のレベルから、高度な記号式に至るまで階層をなしている。抽象作用が進むにつれて個別の特徴はどんどん捨てられ、より包括的になっていく。自然で正常な抽象作用の流れは、非言語のレベルから順を追って抽象していくことであり、いきなり抽象のレベルを飛躍したり、一定のレベルに留まらないことである。抽象度の高い一般的な考えは、より具体的な個々のケースと照合することが大切である。抽象作用を自覚することで、私たちは常に物事の一部を見て、一部分を知っているにすぎないことを知り、ことばや知識の限界に気づく。すべてを知り、すべてを語ることができるという錯覚を捨てることで、謙虚に物事を知ろうとする態度が養われる。

#### (8) 抽象のレベル

##### 【非言語のレベル】

1. 「できごと」または「プロセス」のレベル：科学者によって推論されている知覚以前の世界。人間の神経組織によって直接的にとらえることはできない。
2. 微視的レベル：顕微鏡などの器具を通して感覚的にとらえられる世界。
3. 知覚のレベル：五感で直接的にとらえられる事物の世界。神経組織によって「できごと」のレベルから抽象され、「形」「色」「音」「触感」などとして感じられる。感覚器官は敏感だが、知覚される範囲は制約され、限定されている。私たちは実際に存在するものの一部分にしか注意を向けていない。
4. 感情、およびことばによらない思考のレベル。
5. 運動のレベル。

##### 【言語のレベル】

6. 記述のレベル：知覚したものにラベルをつけて記述する。事実すなわち非言語のレベルで知覚したことを、ことばで述べる最初のステップで、以下の特徴を持っている。
  - ・観察（知覚）のあとで述べられる。
  - ・観察（知覚）したことだけか述べられる。
  - ・事実のすべてではなく、いくつかの選択された事実だけが述べられる。
  - ・誰もが認めざるをえないことだけが述べられる。
7. 推論のレベル 1：事実の記述にもとづいた一次的な推論のレベル。
  - ・観察（知覚）の前でも後でも途中でも、いつでも述べられる。
  - ・観察（知覚）した事実を越えたことが述べられる。
  - ・一般化したことが述べられる。
  - ・他人に承認される場合もあれば、承認されない場合もある。
8. 推論のレベル 2：推論 1 について、さらに推論を重ねることで、より一般化された考えが導きだされる。
9. 推論のレベル 3：さらに推論を重ねることで、より普遍的な一般理論が導きだされる。

こうして積み重ねられた推論は、具体的なレベルや非言語のレベルにおける事実と照合されなければならない。そこで発見された新たな事実にもとづいて、ふたたび抽象のプロセスをたどることで、より事実即した理論が得られる。このように抽象のプロセスを循環することで、常に環境に適応し

続けることができる。ことばのレベルにとどまって論理的な整合性だけを求めると、理論の空回りに終ってしまう危険がある。

### (9) 一般化

わずかな事実の観察から得られた推論の結果を全体にあてはめることをいう。「いつも」「すべて」などのことばが用いられるか、あるいはそのような前提で語られる。だが、事実のすべてを知り尽くすことはできないし、事実はたえず変化している。どんなに精密に観察しても事実の一面しかとらえられない。それにもかかわらず、断定的な表現を用いることで、つい、その事実が「いつも」「すべて」のケースにあてはまるように錯覚することがある。

## 5. 事実に即したことばの使い方

一般意味論は、私たちがたえず変化するプロセスの世界に生きているという前提に立つ。プロセスの世界では、一定不変の真理もなければ、絶対に確実なものもなく、真理は暫定的なものであることを認めざるをえない。そこから知の限界を知り、「分からないから調べてみよう」という態度が芽生えてくる。そのような態度は「遅延反応」となって現われる。他人のことばや、自分の考えにたいして、即座に反応しないで「本当かどうか調べてみよう」とする。同じことばにたいしても、時と場合に応じて適切な反応ができるようになる。もちろん、瞬時に習慣的な反応をすることは、たいいていの場合、時間と労力の節約になり、「ことばはそれが表すモノではない」ことを自覚しているかぎりにおいて有効である。そのような自覚の助けとなることばの使い方には以下のようなものがある。

(1) 同じことばでも同じものを表すとはかぎらないことや、同じものでも時間と共に変化することを忘れないために、インデックスや日付をつける。

「わたし 1980」≠「わたし 1994」、「ロシア 1980」≠「ロシア 1994」、「民主主義 1」≠「民主主義 2」

(2) 物事にたいする感じ方や考え方に個人差があることを忘れないために「私にとって」「私の意見では」「私の見たところ」「私の推論では」などのことばを添える。

(3) すべてを言い尽せないことを意識しておくために「・・・など」をつける。

(4) 断定や変化しない状態を表す「・・・である」型の文よりも「・・・する」型の文を使うように心がける。「私は駄目な人間です」→「私は昨年の大学受験に失敗した」、「あいつは嘘つきだ」→「〇〇は昨日ぼくと～に遊びに行こうという約束を破った」、「私は教師です」→「私は一週間に 2 日、その会社で中国の人に日本語を教えています。」

(5) できるだけ具体的な数や量を表すことばを用いる。

(6) 「・・・を除いては」「・・・の条件では」など、例外や条件を示すことばを用いる。

(7) その他、差異を明らかにし、例外を考慮にいれ、状況と行為を関係づけるように工夫して話す。

## 6. 地図と現地のたとえ

一般意味論の要点を「地図」と「現地」のたとえを用いてまとめると以下のようなになる。

- ・ことばは外在的な世界を表す地図にたとえることができる。
- ・適切な地図は現地に類似した構造を表していて現地の状態をかなり正確に推しはかることができる。
- ・地図は現地ではない：ことばはそれが表すものと同一ではない。
- ・どんなに正確な地図も現地の状態が変化すれば役に立たなくなる。
- ・地図は現地に関するすべての情報を伝えることはできない：ことばですべてを語りつくすことはできない。
- ・地図がより広い現地をカバーしようとするれば、それだけ現地についての細部の情報が少なくなる：一般化によって個別の特殊な情報は失われる。
- ・同じ現地について違った地図を作ることができる。
- ・地図についての地図を作ることができる：ことばを人に伝えたり、ことばについて考えたりできる。その結果としてもとの情報の一部が失われたり、歪められたりすることがある。地図の正確さを維持するには、つねに現地（あるいは、より具体的な地図）と照らし合わせて点検することが必要である。

## 私たちは世界をどのように認識しているか

### ～認識論的プロフィール（意味論的スペクトル）の勧め～

フランスの哲学者ガストン・バシュラール（『否定の哲学』中村雄二郎、遠山博雄訳、白水社、1978）によれば、西欧文化は認識モデルの飛躍を経て発展してきた。この飛躍は個人の成長過程においても繰り返され、世界への適応能力を増していく。しかし、新しい認識モデルを獲得しても、人は古いモデルを捨ててしまうわけではない。私たちは、21世紀に生きていても、心理的には中世かそれ以前と変わらなかったり、学問においては現代の知的素養を身につけていても、日常の私的な生活においては原始人の反応を示すこともありうる。バシュラールは、各段階の認識モデルが日常生活で適用される頻度を観察して分布を調べ、どの段階が優位を占めているか、その偏りや粗密を「認識論的プロフィール」によって表わすことを提案した。ここでは、バシュラールの考え方を受け継いだサミュエル・ボワ（Samuel Bois “The Art of Awareness” 1966）を参考にしながら、各段階の特徴を概観しておく。

#### 1 実感の段階

世界は自分が感じたままのものであると信じ込んでいる素朴な原始的アニミズムの段階。世界は気まぐれな神々や精霊たちによって支配されていて、人間の力ではどうにもならない。宗教的な儀式や呪術的慣習を重んじ、迷信を信じ、お守りを持ち歩き、占いによって自分の行動を決める。あらゆる事象は擬人化され、世界は自分と自分の欲しいものによって成り立っている。このような心性を持った人々にとっては、自分の身に降りかかるすべてのことは他者や環境や運命のせいであり、反省されない生の感情をぶつけることが、ありのままに生きることである。

#### 2 分類の段階

世界は言語が表わすままに存在すると信じている段階。分類や統計的数値によって対象を客観的に把握しようとする。単純で明快な思考や論理を尊び、イエスかノーかの意思決定を短時間に行うことが有能とされる。ことばの「正確な」定義や、ある事象にたいして「真の」原因を求める。世界への適応力を増すには、多くの知識と緻密な分類が必要だと考える。

#### 3 関係の段階

世界は自分の外にあって客観的に観察し制御できると信じて、そのための方法や道具を開発する。観察にもとづいて理論を立て、その理論から新たな発見が導かれる。「科学的態度をとること」が至高の価値であると信じている。世界は相互に関連する部分や要素の複合体であって、ある事態が生じると、それに先立つ多くの出来事の総合的な結果であると考え。状況の変化に応じて習慣や態度を修正し、臨機応変に対応できるしなやかさを備えている。

#### 4 仮説と創造の段階

世界の構造は仮説の体系から成り立っていると信じている段階。客観性よりも世界と私たち自身とのかかわりを重視する。何の固定観念もなく、既成の思考モデルで問題が解決できないと分かれば、容易に別のモデルに移ることができる。100パーセント正しいものではなく、予測はたんなる可能性にすぎない。ひとつの事象にたいして、いくつかの説明が可能である。光はエネルギーの波ともいえるし、粒子のシャワーともいえる。人間の行動は、厳密な決定論の立場からも自由選択の観点からも説明できる。以前に否定していた価値はさらに大きい価値体系に組み込まれ、相互に排除しあってきた関係は、さらに高いレベルにおいて包含され、相補的關係として認識される。自分の経験について、経験の仕方に気づく。仮説の段階で、既成のもの絶対的な力が弱まり、知識体系、制度、存在において私たちに支配しているものの影響力が崩れることになれば、創造の可能性が開かれることになるだろう。20世紀は物理学など科学の分野では大きな革新をとげたが、人間の生き方の革新は、まだ始まったばかりである。身近な夫婦関係から国際政治にいたるまで人間の活動のあらゆる局面において人々がもっと頻繁にこの仮説の段階で機能できるように手助けすることであるといつてよい。

第1段階から第4段階までを、具体的な事例で考えてみよう。たとえば「うちの子は問題だ」といった場合の、「問題」という言葉に対する反応を調べてみると、問題という言葉や状況に対して、第1段階では、心配で、困惑し、不安で、我慢の限界だといった無批判で無条件の反応が支配している。問題について考えるという段階には至っていない。第2段階になると、問題と子どもを分類しようとする。問題の「真の」原因を探し求める。その理由とその背後に解決法があると考えて、次のように問いかける。「あの子は怠け者なのか」「悪い友達と付き合いがないか」「昨日、先生に言われたことに腹を立てたのか」「ノイローゼなのか」その子どもについてすでに結論を持っているなら、自分その子について以前から考えていることの証拠として、問題を解釈するかもしれない。

第3段階になると、事態はそう単純ではない、この状況にはたくさんの要因が絡んでいそうだと分りはじめる。「現在の状況とのかかわりの中で、家庭、過程、学校、その他のところで、どんなことが起こっているのか」「本人自身はどうありたいと思っているのか」「過去にどんなことがあっただろうか」など、さまざまな要因との関係という視点に立って考え、自分の手が届き、事態の改善に影響するとみられる要因を見つけて問題解決をはかる。

第4段階に入ると、進行中の事態に自分も関与しているのだと自覚するようになる。問題を解決するために「まず自分をどのように律すればよいか」を考える。ひとつの事態に対して、幾通りものストーリーが語られうるということも分かっている。これまでは「子どもの問題」というものがあって、客観的に観察することで解決できそうに思っていたが、自分も含めたさまざまな要因が複雑に絡み合っていることが分かる。問題状況の構図は、それに関与する者それぞれによって異なり、それぞれの立場によって関与の仕方も違ってくる。そもそも「問題」だと認識するに至った土台（常識、論理、前提など自分がよりどころとしてきた思考のモデル）をも疑わざるをえなくなる。

もうひとつ「コミュニケーション」ということばについても調べてみよう。

第1段階では、コミュニケーションは思想とか情報を取り立てた形でやりとりする段階には達していない。この段階でのコミュニケーションは、儀式的で衝動的である。「おはようございます。ごきげ

んいかがですか」－「おかげさまで」といったやりとりは儀式的コミュニケーションの典型である。ここで意図されているのは一種の相互認識である。手紙における時候の挨拶や「拝啓」「敬具」といった決まり文句もそうである。敬語や敬称は相手との心理的距離を保ち礼儀を維持するのに一役買っている。社交的な付き合いの場における会話を持ってコミュニケーションとしている人たちもこの段階にあるといえる。

他人にがみがみ意見をしたり、怒鳴りつけたり、叱ったりするといった、言葉を通した感情のほとばしりもこの段階の衝動的なコミュニケーションの例である。話し手は自分の感情の抑圧から解放されることになるが、聞き手がそこから有益な内容を受け取ることができるかどうかは別問題である。自分の番が待ちきれずに発言したり、質問といいながら自分の言いたいことを主張する場合など、自己主張や自己顕示の欲求を満たすための行為などもこの段階に入る。

第2段階では、メッセージそのものが注目の焦点になる。自分の意図を正しく相手に伝えるのにピッタリの言葉、説得力のある言葉を探し求める。間の取り方、身振りの使い方なども含めて話術を身につけようと思う。書き言葉においては、文章のスタイル、レイアウト、図表やイラストにも気を配る。話し合いの場合には、一定の手順に従って交互に交わされる言葉がうまくかみ合って組み立てられていく。いずれの場合も、言葉が明快で、内容がしっかり組み立てられていることが大切である。それは、ともすれば、イキイキした体験を型にはまった表現にむりやり機械的に押し込めてしまうことにもなりかねない。

第3段階におけるコミュニケーションは、伝達の方法だけでなく、聞き手の要求をも考慮に入れる。聞き手の関心、目的、態度、知識などに合っていることが大切である。話し手が聞き手に問いかけたり、聞き手を動かしてテーマに巻き込み、聞き手の心を能動的にする。デパートでの試食、新車の試乗など、何らかの形で受け手が参加する。コミュニケーションにおける受け手の役割は、送り手の役割に劣らず重要である。

では、第4段階「仮説と創造の段階」におけるコミュニケーションはどのようなものになるだろう？ 一般にコミュニケーションとは、言語や身振り、その他の記号に情報や思想や意見などを詰め込んだメッセージを送り手が受け手に対して伝達することであると理解されている。その場合、いかに誤解を最小限にして正確に伝えるかということが問題になることが多い。コミュニケーション能力を向上させようとして、受け手の側の心構え、関心、その他の心理状態といった諸条件も考慮に入れて伝達が効率よく行なわれるための技術や言葉などの記号の操作方法に磨きをかけることになる。これは、ボワによる西欧文化発展の諸段階に照らし合わせると、第二の「分類の段階」や第三の「関係性の段階」におけるコミュニケーションのとらえ方であるといえる。これにたいして第四の「仮説と創造の段階」におけるコミュニケーションは、大きく異なる様相を見せる。それは「地図は現地ではない」ことや「地図は現地のすべてを表すわけではない」ということをよく知っている者同士の交流である。言い残されたことや他にも違った世界の切り取り方があるということを双方が承知している場合、意見や情報は、いつでも修正可能な仮説として提出される。聞き手の側も、必要とあれば、いつでもそれを自己の一部として取り入れる用意ができています。コミュニケーションを通じて何かを学ぶ姿勢が双方にできているので、お互いに積極的に耳を傾ける。部分の変化は全体の変容に繋がるということ

も分かっているので、論理だけでなく感情、価値、目的など、伝達の過程で受けるすべての影響を考慮に入れることができる。その結果、この段階でのコミュニケーションは、情報の送り手と受け手の双方の変容をともなうダイナミックなプロセスとなる。このようなコミュニケーションを通して深く親密な関係が築かれ、その信頼関係を基盤として、さらに深いコミュニケーションが行なわれることになる。しかし、信頼関係に基づくコミュニケーションは、時としてリスクをともなうことがある。親密であればあるほどコミュニケーションが失敗に終わったときの心の痛手は大きい。そんな場合にも落ち込まずにお互いを許せるところまで信頼関係が深まっていなければならないだろう。

このような要領で、今度は自分で試していただきたい。たとえば、自分は「いじめ」をどのようにとらえているのだろうか？ 自分が「いじめ」にあったときばかりでなく、「いじめ」の場に居合わせたとき、あるいは自らが「いじめ」に加担しているとき、どのような態度をとるかを、この方法で分析したらどのようなことが分かるだろう？ そのほか、いろいろな概念についても認識論的プロフィールを使って振り返ってみることをお勧めしたい。

## 5 参加の段階

ボワは、さらに進んだ創造的コミュニケーションのありようとして「参加の段階」を用意している。動物的な無条件反応の段階から発展してきた人類の文化は、第5段階においてきわめて知的で自由な反応を獲得し、完全に状況に適応した行動が取れる段階に到達すると考えられる。では、完全に状況に適応し、状況と一体になった行動とはいかなるもので、どうすれば到達できるのだろうか。それには、ホリスティックな視点や方法を導入することが必要だと思われる。しかし、この「参加の段階」を語ることには慎重でありたい。じゅうぶんな経験基盤を共有できない事柄について語ることは、ともすれば現実離れした空虚な議論になりかねないからである。そこで、この点について筆者なりの見解は、近いうちに稿を改めて論じることにする。



## 禅と一般意味論

佐藤幸治著『心理禅：東洋の知恵と西洋の科学』（大阪創元社、1961）に「一般意味論と不立文字」と題する章がある。この章で佐藤は S.I.ハヤカワ著『思考と行動における言語』（岩波書店）にもとづいて一般意味論と禅との相似性として次の 3 点を挙げている。

### 1. 言語以前への帰還

ハヤカワは、私たちが牝牛ベッシーを認識する方法を 8 つの段階に分けて示し、これを「抽象のはしご」と呼んでいる。ベッシーは、牝牛、家畜、農場資産、資産、富など、抽象度の異なる概念によって認識されるが、それ以前に私たちがベッシーと名づけている対象そのものがある。言葉以前に感覚器官によって知覚された存在である。さらに、ハヤカワは、それより前の段階として原子や電子などの世界を挙げている。一般意味論で「出来事」あるいは WIGO (What Is Going On) と呼ばれている段階である。それは、宇宙における森羅万象が一体となって切れ目なくつながっている未分化な世界で、ベッシーが、いま、ここに存在するに至った誕生以前と誕生以後を含む時間のつながりや、私たちの知覚から洩れ落ちているベッシーの諸特性もこの段階に含まれる。名前や言葉によって表された概念は対象そのものではなく、対象の諸特性の多くが省かれている。

佐藤は、このような言語以前の認識を求めるところが一般意味論は禅と近いという。

### 2. 悟り

佐藤は、悟りを「根源的な未分化の全体の覚知」ととらえる。それは、私たちが知性、自我、言語などを発達させることによって形成してきた対立概念を解消して根源的全体に立ち返ることを意味する。言語のレベルから知覚のレベルに戻り、さらに根源的なものへと帰還することを意味する。ハヤカワは、善と悪、肯定と否定、熱いと冷たい、愛と憎しみといったように言語の上での対立にもとづく二値的な見方の危険性を指摘し、たとえば白と黒との間にある多くの灰色の明暗を見る、すなわち多値的な見方を獲得することが対立のない世界に至る手がかりになるという。禅も 1 つの見方にとらわれることなく、ものごとを如実に見ようとする無限に多値的な見方であるといえる。

### 3. 衆生の恩

世界は一見競争や対立に満ちていて、それが世界を支配している原理であるかのように見えることがある。しかし、表面上のあらゆる競争や対立の下には、当然のこととして暗黙のうちに世界を動かしている共同の原理が働いている。たとえば身近な衣服について、生地、染色、デザイン、縫製、流通などにどれだけ多くの人手を経ているかを想像してみよう。仏教ではこれを「衆生の恩」と呼び、時間・空間のつながり、人間だけでなく宇宙と生物、無生物まで含む根源的なものであるとする。そのような世界を動かす原理によって、私たちが、いま、ここに存在し、世界全体を動かすために何らかの役に立っていると認識すること。

禅でいう「根源的な未分化の全体」とは、一般意味論で言う「出来事」あるいは WIGO に相当すると思われる。それは、すべての源泉であり、我々の知識や行動はこの段階に立ち返って評価される。アルフレッド・コージブスキーは「知覚過程における言語の役割」という小論の中で次のようなことを言っている。

「このように、深いところで私たちの基盤となっている知識は仮説であり、仮説以外の何ものでもない。我々が見、聞き、感じ、語り、推測するものは、それそのものではない・・・」

コージブスキーはただ「現実」はすべて仮説であると述べているのではない。既成の知を疑い、新たな知の源泉としての WIGO に触れて絶え間ない記号化（言語化）作用を繰り返すことで、私たちは、現実の世界に適応し、正気に生きることができる。

禅も一般意味論も、目指すところは物事がこれから先もずっと変化せずに同一であり続けると見る硬直した世界観から私たちを解放することである。禅が言語による理解を超えて悟りの道を探るのに対して、一般意味論は、私たちの推論の結果である知識を反映している言語の使い方を改善することに関心を持つ。既成の言語に固執しないで、つねに WIGO（あるいは根源的全体）に立ち返って無尽蔵の地下水を小さな桶で汲み上げていくように新たな言語化を試みる。その営みを通して、ときには地下に広がる広大な水脈としての根源的な全体を感じ取ることができるかもしれない。

## 「概念」と「感覚」をつなぐ「ことば」のはたらき

### 養老猛司（2006年2月7日）の発言から

私たちの世界は概念によって成り立っているといってもよい。グレゴリー・ベイトソンは、友人に「君は考えすぎるよ。考えるのをやめてこれを見たまえ。」といて、美しくみずみずしいバラのつぼみを手わたされたとき、「どれだけの概念がそのなかに入っているか考えてみたまえ」と切り返したと Angels Fear Toward an Epistemology of the Sacred” (Macmillan, 1987) のなかで、娘の Mary Catherine Bateson がいつている。感覚と概念の関係は一般意味論の中核をなすテーマだが、ベイトソンは『精神と自然 - 生きた世界の認識論』(邦訳改訂版は、新思索社、2006) のなかで、心身二元論を超えようとしたコージブスキーの試みをを評価しながらも、両者の関係をあまりにも単純化していると批判している。2006年2月7日に大阪厚生年金会館で開かれた K-Opti.com IT Forum 2006 で養老猛司氏が行なった“「**概念**」から生まれた情報化社会”という講演の内容が2月28日(火)付け朝日新聞朝刊の広告欄に採録されている。以下に「概念」と「感覚」について触れた部分を抜き出してみる。

「意識の世界は、言葉でまとめる「概念」と五感による「感覚」の世界に分かれる。例えばリンゴが100個ある。「概念」では、誰にとっても全部同じ「リンゴ」という言葉で表現されるが、「感覚」の世界では、100個のリンゴは各々違う。色、香り、手触りといった感覚、場所、時間、感じる人によって、同じリンゴは二つと存在しない。」

「現代社会は、「概念」が膨らんだ世界である。テレビのニュースを録画すれば何度でも「同じ」ニュースが見られ、それは「概念」の世界である。変わらない「過去のもの」が情報である。最新の情報を追いかけている人は、最先端ではなく、後ろを向いて生きている。10年前のニュースは見られても、10年前の私はどこにもいない。日一日変わっている。脳は、記憶も含めて日々変化している。同じ出来事でも20年前の記憶と、10年前の記憶は、決して同じではない。リンゴと同様「同じ」私はいない。」

「自分にはゆるぎない個性があって、その個性こそ自分の価値観だと暗黙のうちに思っていないか。それは自分自身を「概念」＝「情報」の世界に置くことである。」

「情報化社会は、あくまでも頭の中の「概念」の世界である。情報化社会は医療と似ている。医者は目の前で生きている患者を扱わない。患者の過去の検査結果という情報を扱っている。医者が診るのは患者自身ではなく、数値化された患者である。」

「私たちの根本は「感覚」の世界である。赤ちゃんは言葉を使わないが、感覚はある。言葉を使うのは人間に特異な能力で、そのため他の動物と社会構造が異なる。言葉は矛盾する「感覚」と「概念」

の世界をつなぐ役割も持つ。」

「「情報」に浸りすぎると、私と隣の人は大差ない、と思うようになる。現代人は、「同じ」という情報のはたらきを強調しすぎて「違い」を無視する。遺伝子を見ても分かるように、一人ひとり違っているのは当然で、個性なんて余計なお世話である。一期一会を大切に、人生をかけがえのないものにするためにも、情報化社会の中、「違う」という「感覚」の世界も認識したい。」

「リンゴの例は、かつてノースウェスタン大学でスピーチ・コミュニケーションを教えていたアーヴィン・リー教授が一般意味論の導入によく用いたといわれている。

一般意味論は、第一次大戦の悲惨を経験したコージブスキーが、人類がさらに第二次大戦へと進んでいく事態に心を痛め、言葉などの記号を用いて時間をこえる能力(Time-binding)と、記号を使いながら記号について意識できる(地図についての地図)という、人間独自の能力を生かすことで、人類は正気を維持して生存できるはずだと考えて、『科学と正気』(Science and Sanity, 1933)にまとめた、人間の認識と行動を評価するための体系である。それは、言葉が「感覚」と「概念」の世界をつなぐはたらきを利用して、私たちの思考と体験を整理統合し、生きる方向へみちびくという基準にしたがって、私たちの記号行動に批判と修正をくわえる道具と方法を提供してくれるが、現代社会において分裂傾向にある私たち個人の統合にも役立つのではないだろうか。